題名・調巻形式より見た聖語蔵大智度論について

松本包夫

まえがき

聖語蔵は平安末期から鎌倉初期頃の様式の建築で、正倉院宝庫の東南に建つている間口十尺・奥行十五尺ばかりの四注造本瓦葺校倉造りの経蔵である。もと東大寺の塔中尊勝院に属し、その敷地は正倉院の西北転害門内にあつた。治承・永祿二度の兵火で尊勝院が退転したのち、聖語蔵ひとりその旧地に残つていたが、明治二十六年東大寺は経蔵経典の保存の関係上これを帝室に献納し、翌年正倉院境内の現在の位置に移建された。現在蔵する経典類は七百八十三部、四千九百六十点で、鎌倉時代の東大寺の学僧宗性は、尊勝院にいた関係からか、これら多数の経典の校閲を行つたらしく、彼の奥書を附したものがたくさんある。

明治四十二年、四十三年の両度にわたつて、東京帝室博物館の手による聖語蔵経典整理が行われ、四千九百六十点の経典をつぎの十一類にわけた。

第一類　隋経、第二類　唐経、第三類　天平十二年御願経、第四類　神護景雲二年御願経、第五類　甲種写経、第六類　乙種写経、第七類　寛治版版経、第八類　宋版経、第九類　甲種版経、第十類　乙種版経、第十一類　雑書其他

しかし聖語蔵の経典はこれによつて完全に整理されたわけではなく、今後も精密に調査すれば、もと一巻であつたのが二つに分離して別々に数えられているといつたようなものも発見されるかも知れず、総巻数にはなお出入りが免れないようである。

さてつぎに視野を縮少して、そのうち一種類の経典について見よう。たとえば一部数巻の経典のなかに、出所を異にする別本が幾つか僚巻のように混入して、外見上の巻数を揃えていることがある。私が聖語蔵経典についてこれまでに調査したうちでは、第二類唐経の第五号大智度論六十九巻にそれがとくに甚だしかつた。かつその幾巻かは経巻自体に改竄のあとも見られ、非常に興味ふかいものであつた。

よつて以下、調査報告の一端にかえ、この唐経大智度論について、調巻の形式題名の書式などから、現在ひとつにまとめられている本経が、幾種の別本で構成されているかの分類を行い、かつ経巻自体への改竄の理由を考えようと思うのである。

本論

一

大智度論の内容については今更いうまでもないが、以下述べるところとの関係上、一応これを略説すると、大智度論は大品般若の注釈書で、竜樹作、姚秦の鳩摩羅什の訳出にかかり、全百巻で構成され、大智度経論、摩訶般若釈論、大智論、智度論、大論、摩訶般若波羅蜜経釈論など数種の別名がある。その内容は百巻を九十品に分け、その初品をさらに五十一段に分つて、これを第一巻より第三十四巻までに配分して経の第一序品を釈し、第三十五巻より第百巻までの六十六巻は、経の第二報応品より第九十嘱累品に至る八十九品を略釈したものである。

現在、聖語蔵の唐経大智度論は写本巻子装で、百巻中六十九巻を存している。すなわち

巻一、二、三、四甲、四乙、五、六甲、六乙、七、三十三、三十七、三十九、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一甲、七十一乙、七十二、七十三甲、七十三乙、七十五、七十六、七十七、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百

である。うち巻四の甲と乙、巻六の甲乙と巻七はそれぞれ同内容、また巻七十一甲は巻六十六の後半および巻六十七、巻七十二は巻六十八および巻六十九の前半、巻七十三乙は巻六十九の後半および巻七十の前半とそれぞれ重複し、ここに既に別本の淆入が明らかで、実質的には六十二巻を残していることになる。

二

以上の各巻をまず調巻形式から眺めよう。

褾および本紙の紙質色合い、軸形、用紙一張の寸法などの綜合見地より、一目にして別本とわかるものを分つと、ほぼ四類に大別し得る。類別に特色を記すと

「第一類」

巻一、二、三、四甲

褾は新補の巻四甲を除き薄手黄紙を用いる。本紙は黄土色の黄麻紙であるが、褾に比して卵黄色が強い。軸は黒漆塗細型棒軸。本紙一張の寸法は縦八寸九分五厘より九寸、横一尺五寸四分より一尺五寸六分五厘、二十六行。第二巻と第三巻の巻中に紙長の差甚だしいもの二、三張あるが、各巻ほぼ右の寸法に一定している。さらに題名の書き方から見て

も、この四巻が完全に同本であることは、後述するとおりである。惜しいことに全六十九巻中、四巻を残すに過ぎない。

「第二類」

巻六甲

標新補、巻首を欠いている。本紙は薄手黄麻紙。一張の寸法は縦八寸五分五厘、横一尺七寸一分、二十六行。特長は縦長が非常に短かい点、本紙に界線のない点で他に類例を見ず、細型棒軸の軸端もこの巻のみ朱漆塗りである。ただ一巻しか存しないが調巻形式上珍らしい異本である。

「第三類」

巻三十三

標後補。見返しに「文永元年甲子九月二十三日酉時於海住山十輪[院]結構表紙奉書外題畢　法印宗性」の墨書がある。黒漆塗細型棒軸。本紙一張の寸法は縦九寸三分五厘、横一尺九寸、二十九行。縦長は各巻を通じ最大型である。注目すべきはその紙質と書体で、横に簾目の透けて見える褐色の薄紙に、非常に小ぶりかつ謹厳尖鋭な健筆でしたため最後まで字くずれがない。きわめて慎重に書写されたものらしい。なお内題の形式は「大智度論釈初品中善根供養　第卅三」と記し、後述する第一類の内題形式と多少似かよっているが、調巻上明かに彼本と異る。

「第四類」

以上の三類六巻を除く六十三巻

この類は題名形式から見ると、明かに別本と考えられる数種の混淆で、実はひとつの範疇におさめることが出来ない。しかしここでは右の六十三巻が調巻形式上同一である点から、かりにまとめて第四類とし、通観される特色を述べよう。

標は新補の巻五、八十七、九十一、後補の巻四十一、四十三、四十六、四十七、四十九の八巻を除き、いずれも褐色。軸は漆塗棒軸で太く、外見小豆色の光沢を出だす。本紙は黄麻紙を用い、一張の寸法縦九寸二分前後、横一尺八寸二、三分より一尺九寸四、五分のものが大部分を占め、一尺七寸五、六分のもの、二尺前後の横長のものも若干ある。一張の行数は二十七、八行で、ときに二、三行の増減もある。用紙は厚手薄手を雑張し、これに伴って紙色濃淡あり、甚だしきは巻中数度異質の紙を継張したものもあって、首尾一貫同寸法同質紙を用いた巻は少ない。巻初の謹厳な書体が張を追うにつれて次第に崩れ、それがまた途中で巻初の謹書に還るなど、書体の乱れも多く、文字も大小さまざまで一定していない。このようにやや乱雑不整備なきらいはあるが、概して雄渾暢達な筆致、行界線の長短、界広の寛狭の一定しない点、大ぶりな巻装などから見て、若干地方臭を帯びた唐経独自の特色を現しているといえよう。

三

以上、唐経大智度論六十九巻が、四種の調巻形式の異った別本から成

つていることを明らかにしたが、つぎに題名形式の上から眺めてみよう。

第一類の四巻は調巻上同一であるとともに、題名形式からも同本であることがわかる。すなわち

「巻一」

外題　大智度論巻第一　一帙

内題　摩訶般若波羅蜜経釈論巻第一

説大智度縁起品第一　竜樹菩薩造（図版第二十上）

巻中内題　大智度論初品如是我聞一時釈論第二

尾題　大智度論巻第一

「巻二」

外題　大智度論巻第二　一帙

内題　大智度論摠釈如是我聞品第三　二

尾題　大智度論巻第二

「巻三」

外題　大智度論巻第三　一帙

内題　大智度初品中住王舎城釈第四　三

尾題　大智度論巻第三

「巻四甲」

（標新補）

内題　大智度初品菩薩釈論第五　四

尾題　大智度論巻第四

うち一見複雑そうな内題も表に示せば

内題			
経名	品名	初品各段の名称と順序	巻数
摩訶般若波羅蜜経論釈論	説大智度縁起品	第一	巻第一
大智度論	初品	如是我聞一時釈論第二	
大智度論	総釈如是我聞品	第三	二
大智度	初品中	住王舎城釈第四	三
大智度	初品	菩薩釈論第五	四

右のようにほぼ同一形式をとつており、別本の混入は認められない。

つぎの第二類、第三類はそれぞれ一巻だけで、最後の第四類のみが、前述のように内題の形式から更に幾種かの別本に分けることが出来るのである。そこで以下、第四類のみをとり上げて、その内題の記しかたを眺めて見よう。第四類の経巻六十三巻のうちの最も多く記されている内題形式は、巻三十七、三十九、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百の四十一巻にあるもので、その形式は

内題　大智度経論巻第……

釈第……品 訖第……品

巻中内題　釈第……品

尾題　大智度経論巻第……釈第……品 訖第……品

内題　大智度経論巻第……

釈第……品　（図版第二十下）

尾題　大智度経論巻第……釈第……品

これを実際の巻について見ると、たとえば

「巻五十」

内題　大智度経論巻第五十

釈第十九品下訖第廿品

巻中内題　釈第廿品

尾題　大智度経論巻第五十釈第十九品 訖第廿品

「巻九十」

内題　大智度経論巻第九十

釈第七十九品

尾題　大智度経論巻第九十釈第七十九品

の如くである。前者は一巻中に経の二品以上を含む場合（第十九品下と第二十品）後者は一巻一品（第七十九品）のもので、ともに釈する経中の品を数をもつて示し、内題は必ず二行とし、巻中にあつては釈する品数を記すにとどまる。この形式をかりにAと呼ぶことにする。

つぎに、巻六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十の十巻に記す別な形式の内題がある。左にこれを列記すると

巻数	内題	巻中の内題	尾題
六十一	大智度論釈随喜品第卅八　六十一	大智度論釈第卌品上　塹型品	大智度論巻第六十一
六十二	大智度経論釈第卅九品訖卌品上第　是能品　六十二	大智度論釈第卌一品上　嘆浄品	大智度論巻第六十二釈卅九品 訖第卌品上
六十三	大智度論釈第卌品下訖卌二品上第　六十三	大智度論釈第卌一品上　无作行品	大智度論巻第六十三釈第卌品下訖 第卌一品上
六十四	大智度論釈第卌一品下訖卌二品上第　六十四	大智度論第卌二品上　无作行品	大智度論巻第六十四釈第卌一品下 訖第卌二品上
六十五	大智度論釈第卌二品下訖卌三品第　六十五	大智度論釈第卌三品　百波羅蜜品	大智度論巻第六十五釈第卌二品下 訖第卌三品
六十六	大智度経論釈第卌四品上逕耳品　六十六		大智度論巻第六十六釈第卌四品上

六十七	大智度経論釈第卌四品下	六十七	大智度論巻第六十七釈第卌四品下
六十八	大智度論釈第卌五品乾第卌六品上魔事品	六十八	大智度論巻第六十八択第卌五品乾第卌六品上
六十九	大智度論釈第卌六品下乾第卌七品上	六十九	大智度論巻第六十九釈第卌六品下乾第卌七品上
七十	大智度経論釈第卌七品下乾第卌八品第七十	七十	大智度論巻第七十釈第卌七品下乾第卌八品
	大智度論釈第卌六品上両不和合品		
	大智度論釈第卌七品上報恩品		
	大智度論釈第卌八品間相品		

右の表のようになる。この十巻をBと仮称して、さきのAと比較して見よう。

まずAB両グループから、各一巻を代表として採り出して、その題名形式を見ると

Aの一例（巻五十）

（内題）	（巻中の内題）	（尾題）
大智度経論巻第五十釈第十九品下乾第廿品	釈第廿品	大智度経論巻第五十釈第十九品乾第廿品

Bの一例（巻七十）

（内題）	（巻中の内題）	（尾題）
大智度経論釈第卌七品下乾第卌八品七十	大智度論釈第卌八品間相品	大智度論巻第七十釈第卌七品下乾第卌八品

右の両者の相違を表をもつて示せば

	内題	巻中の内題	尾題
A	二行に記し、巻数を内題中に書き入れる	品数のみを簡単に記す	経名を、大智度経論となす
B	一行に記し、巻数は内題下方に別記す	経名、品数、品名を列記す	経名を、大智度論となす

すなわち、内題はAは二行とし、Bは一行に記す（図版第二十一上）。巻中の内題はAが品数のみを掲げるに対し、Bは品数と品名を併記する（図版第二十一下）。また尾題もAは「大智度経論」Bは「大智度論」に作るなど、種々の相違点があり、調巻形式は似ているがAとBはそれぞれ別本と考えるのが妥当なようである。

つぎに巻四乙、巻五、巻六乙の三巻も、その内題を見ると

「巻四乙」

大智論釈初品中菩薩第五　巻第四

「巻五」

大智論釈初品中摩訶薩埵第六下乾第七釈菩薩功徳　巻第五

「巻六乙」

大智論釈初品中十喩第八　巻第六

右のようで、AB中にこの三巻のように、経の初品を釈する若い巻数のものが現在欠けているため、内題の比較が出来ないが、経名を三巻とも「大智論」としている点が他に比して珍らしく、別出してCとなし得ると思う。

四

第四類の最後に、経巻自体に改竄が試みられたものがあつたりして最も多くの問題を提示しているのが、巻七、七十一甲、七十一乙、七十二七十三甲、七十三乙、七十五、七十六、七十七の九巻である。以下その各巻の題名形式と特色を述べると

「巻七」

外題　大智度論巻第七

内題　摩訶般若波羅蜜経論釈初品中如幻等義第七

尾題　大智度論巻第「七」(補筆)釈第卌一品
〃〃六十四訖第卌二品

尾題は旧の「六十四」を灰色絵具で塗消して、その右脇に「七」と墨筆補正がある。また内題右肩に「古本第六之初当之」巻末に同筆で「古本第六□□四□□之前当之」の墨記があり、巻末墨記の右肩には尾題の補正と同色絵具で合点を附している。その墨記のいうように、巻の内容は別本第二類および第四類Cの二つの第六巻の前半と同じである。

「巻七十一甲」

外題　大智度論巻第「七十一」(補筆)
〃〃六十七

内題　摩訶般若波羅蜜品第卌四之二　七十一

尾題　大智論巻第「六十七」(擦消・なぞり書き)
〃〃七十一

外題の訂正は朱筆によるもの。尾題はもと「七十一」とあつたのを擦り消して、その箇所に「六十七」と墨筆でなぞり書きしている。内容は別本巻六十六の後半と巻六十七(いずれも第四類のB)の全部とを併せたものである。

「巻七十二」

外題　大智度論巻第七十二

内題　摩訶般若波羅蜜品第卌五　覚魔　七十二

巻中内題　摩訶般若波羅蜜不和合品第卌六

尾題　摩訶行経巻第七十二

第一紙の下欄に「六十八」第十八紙の上欄に「或本已下六十九巻」の墨記がある。すなわち別本巻六十八および巻六十九(いずれも第四類のB)の前半を併せたものである。

「巻七十三乙」

外題　大智度論巻第七十三

内題　摩訶般若波羅蜜品卌六之二　七十三

巻中内題　摩訶般若波羅蜜仏母品卌七

尾題　摩訶衍経巻第七十三

第一紙下欄に「六十九」と墨記があり、別本巻六十九の後半および巻七十前半(いずれも第四類のB)と同一内容。

「巻七十一乙」

外題　大智度論巻第七十四(補筆)
〃

内題　摩訶般若波羅蜜品第卌九太事興品　「巻七十一」(補筆)

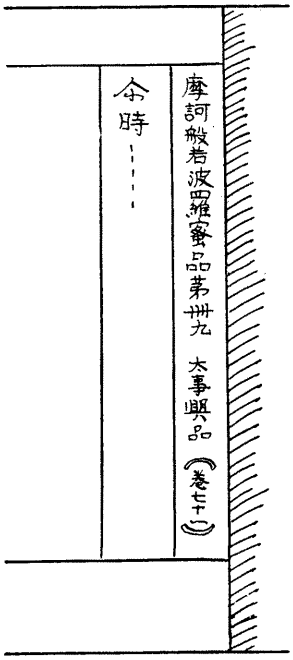
巻中内題　摩訶般若波羅蜜譬喩品第五十　七十五（墨消）

巻中内題　摩訶般若波羅蜜知識教発心品　第五十一

巻中内題　摩訶般若波羅蜜験知品　第五十二

尾題　大智度論経巻第七十五（「二」（擦消・補筆））

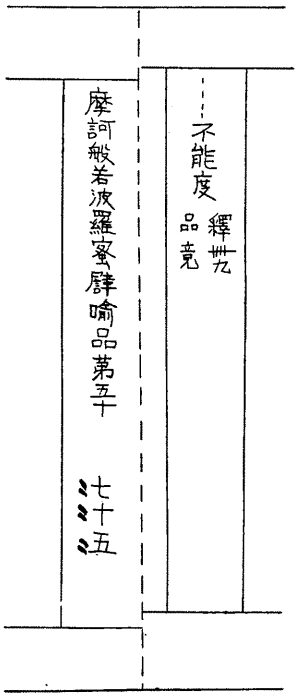
外題は朱筆で七十四を、尾題は墨筆で七十五をそれぞれ七十一と改記。内題下方に「巻七十一」と墨筆書き入れ。またその内題は



（　）内は補筆

第一図

第一図のように、通常空欄とすべき第一紙第一行に記している。またこの第一行のみ界広約四分五厘強で、他に比して狭い。この点より察するに、元来この部分は巻中の内題であつたものを、そのさきの部分を截り捨てて巻首に移し、標に直結せしめ、内題らしく下方に巻数「巻七十一」を補筆したものであろう。外題の訂正もそのとき行われたと思われる。また巻中、第四十九品末と第五十品初との間に



第二図

第二図のように巾約一分の細行があり、これはつぎの行を截り離した痕跡と見られ、また横界線も不連続で、明かに前後別巻の継ぎ貼りである。しかもこの第五十品は、その下方に現在は墨で塗り消されているが、「七十五」と記されていた点より見て、もと別本巻七十五の内題であつたのであろう。

「巻七十三甲」

標後補

内題　「大智度経論巻第七十三」（補筆）

摩訶般若波羅蜜阿鞞跋致第五十四　七十七（「三」（擦消・なぞり書き））

巻中内題　摩訶般若波羅蜜転不転品第五十五

尾題　「大智度経論巻七十三」（補筆）　釈第五十四品　訖第五十五品上

標紙見返しに

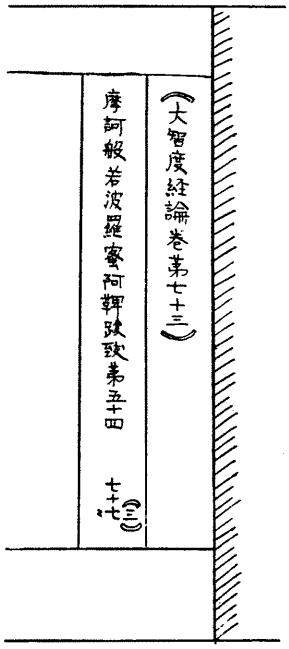
「文永元年甲子九月二十三日酉時於海住山十輪院

結構表紙　奉書　外題畢

法印宗性」

と墨書があり、尊勝院の宗性が文永元年九月二十三日に、本巻の表紙を補い外題を記したことが知られる。

内題は



《　》内は補筆

第三図

第三図のように第一行に補筆があり、さらに第二行の本来の内題の下方巻数を示す数字「七十七」を「七十三」となぞり書きで改竄している。すなわち本巻は、いま巻七十三となつているが元来巻七十七だつたのである。また巻末部分は後補紙を継張しているが、尾題の筆体は巻初第一行の補筆と同筆跡で、標紙見返しの宗性のものとは別筆である。

「巻七十五」

外題　大智度論巻第七十五

内題　「大智度経論巻第七十五」(補筆)

「釈第五十六品下　訖第五十八品」(補筆)

巻中内題　摩訶般若波羅蜜夢入三昧品第五十七　七十九(塗消)

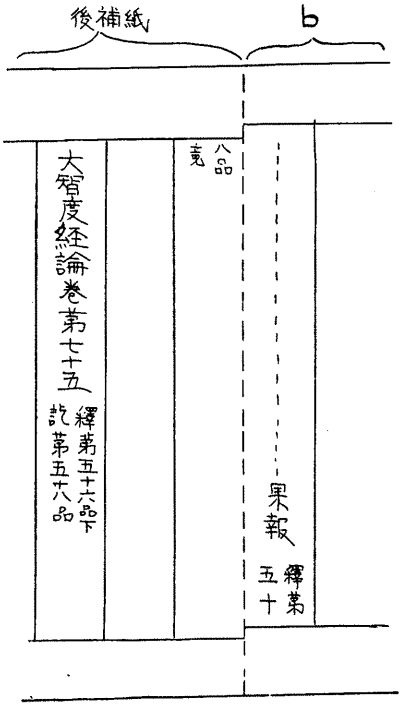
巻中内題　摩訶般若波羅蜜恒伽提波品第五十八

尾題　「大智度経論巻第七十五　釈第五十六品下　訖第五十八品」(補筆)

巻首巻末は後補紙。その筆跡は前巻におけるものと同一である。また巻中、第五十七品以下は、その題名下に現在墨で塗り消しているが「七十九」とある点より見て、もと別本巻七十九の巻初に位置するものであつたことが知られる。要するに本巻は

巻首後補紙＋別本(a)＋別本(b)＋巻末後補紙

の順で構成されているのである。第四図は、その別本(b)と巻末後補紙との継合箇所である。



第四図

「巻七十六」

外題　大智度論巻第七十六

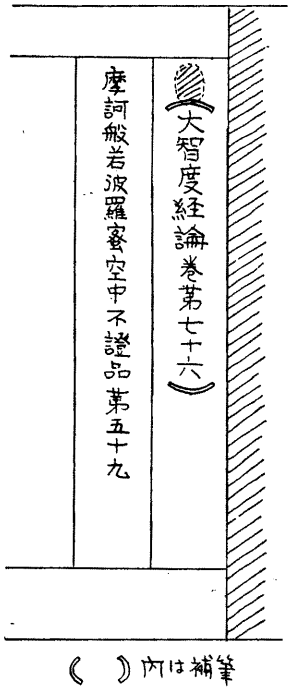
内題　（補筆・上方に擦消あり）「大智度経論巻第七十六」

摩訶般若波羅蜜空中不証品第五十九

巻中内題　摩訶般若波羅蜜夢中不証品第六十

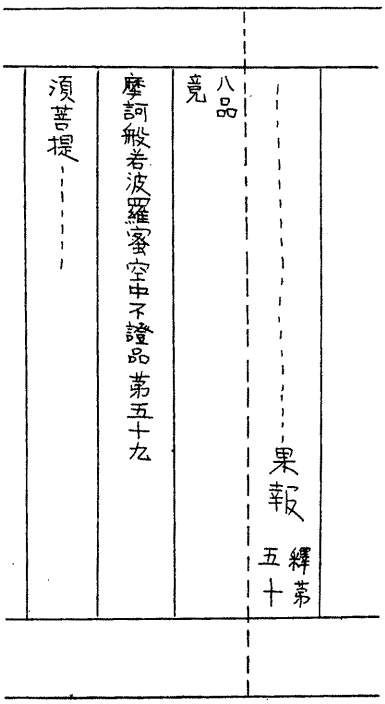
尾題　（補筆）「大智度経論巻第七十六釈第五十九品　訖第六十品上」

内題の部分を図示すると



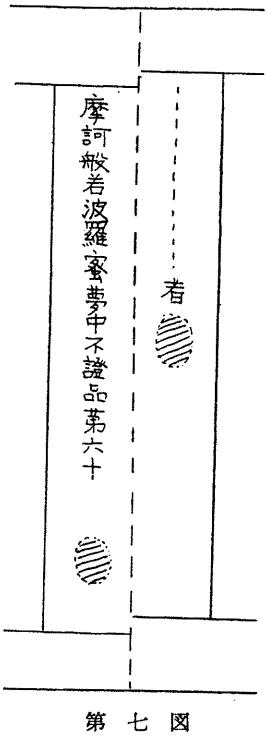
第五図

第五図のように、第一行補筆の上方に文字を擦り消した痕がある。その状態および釈する品数より推して、前掲第四図巻七十五の巻末bの後につづくもので、本来はb図とともに一巻になつていたようである。内題「摩訶般若波羅蜜空中不証品第五十九」の下方に巻数の記入のないのも、元来これが第六図のように巻中の内題であつて巻数記入の必要がなかつたためであろう。



第六図

更に経中、第六十品以下は別本を継張したものである。図示すれば



第七図

第七図のようで、題名下方の文字を擦り消した痕跡は、その箇所より考えて、巻数を記してあつたもの、すなわちさきの巻七十九につづくもの「八十」の二文字であつたと考えられる。この推定が正しいとすれば、本巻の第六十品以下は別本の巻八十を補張したものである。なお巻末は後補紙で、その筆跡は巻七十三甲、巻七十五両巻の首尾の補筆と同筆で

ある。

「巻七十七」

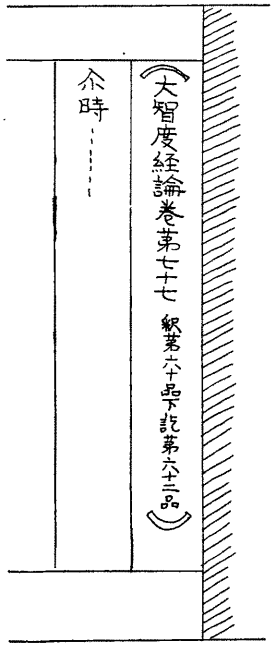
外題　大智度論巻七十七

内題　「(補筆)大智度経論巻第七十七釈第六十品下　訖第六十二品」

巻中内題　「(補筆)釈第六十一品」

巻中内題　「(補筆)摩訶般若波羅蜜経等学品第六十二」

尾題　「(補筆)大智度経論巻第七十七」



( )内は補筆

第八図

第八図は内題の部分を図示したもので、もとの題名を擦り消したうえに後補内題を記している。第一行に記している点から見て、擦り消されたのはもと巻中の内題であったのを、その前の部分を截断して標紙に直結したものと思われる。経中、第六十一品以下も後補紙で、その筆体は前記三巻のものと同一筆である。

五

右に述べた巻七、七十一甲、七十一乙、七十二、七十三甲、七十三乙、七十五、七十六、七十七の九巻について、その内題（後補を除き）およびもと内題であったものの形式を列記すると

（巻　七）　摩訶般若波羅蜜経論釈初品中如幻等義第七

（巻七十一甲）　摩訶般若波羅蜜品第卌四之二　七十一

（巻七十二）　摩訶般若波羅蜜品第卌五覚魔七十二

（巻七十三乙）　摩訶般若波羅蜜品卌六之二　七十三

（巻七十一乙）　摩訶般若波羅蜜品第卌九大事興品

……

（巻七十一乙）　摩訶般若波羅蜜譬喩品第五十　〃七十五

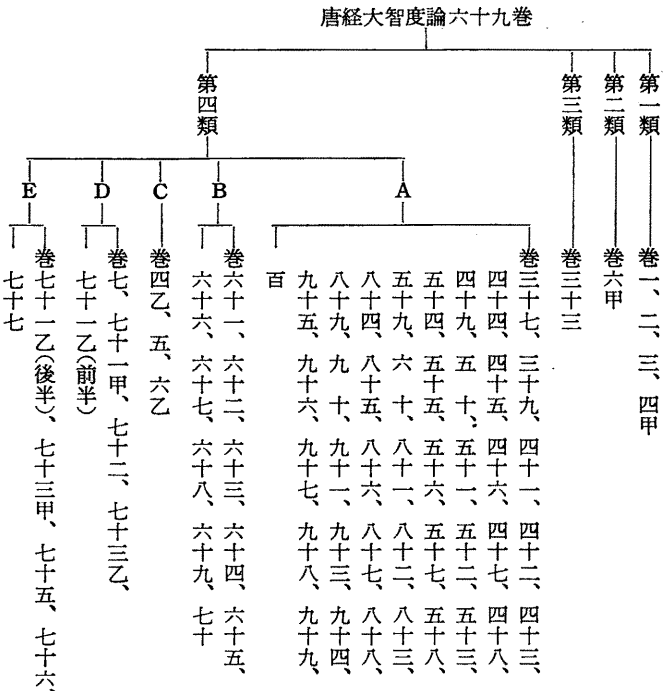
（巻七十三甲）　摩訶般若波羅蜜阿鞞跋致第五十四　〃七十七

（巻七十五）　摩訶般若波羅蜜夢入三昧品第五十七　〃七十九

（巻七十六）　摩訶般若波羅蜜夢中不証品第六十

このように、前五者と後四者との間に形式の相違が見られる。すなわち内題を記す場合、前者は経の品数を重視し、品名は添加的に、記すもあり記さぬもある。後者は反対に品名を主に、品数を下方に記し、ここに前後二種の形式の内題が混在していることがわかる。いまかりに前五者を第四類のD、後四者をEと呼ぼう。

以上をもつて全六十九巻の調巻・題名両形式からの分類を終つたのであるが、その結果はつぎのようである。



第一、二、三類はそれぞれ調巻形式上、明らかに別本と考えられるもの。第四類のA、B、C、D、Eは調巻上同形式であるが、内題形式より見れば別本と考えるのが至当なものである。なおさきにも述べたが、第四類中には巻七と巻六乙、巻六十六・巻六十七と巻七十一甲、巻六十八と巻七十二のように、同一巻装であるのに内容の重複するものさえあり、この点からも別本の混在が明かである。

このように聖語蔵唐経大智度論は、調巻題名の両面から、八種の別本が集つていることがわかるのである。

六

さて以上、調巻題名両形式からの分類を終つたが、最後に第四類中DEの両グループ数巻に加えられている改竄のゆえんを、解明して見よう。

さきに巻ごとに記したDEの各巻の改竄状態を、総括列記すればつぎのようである。

一、旧の巻七十四の後半に、旧の巻七十五を継張し、外題の「七十四」尾題の「七十五」をそれぞれ「七十一」と書き改め、かつ内題にも「七十一」と補筆して、あらたに巻七十一（乙）を作つた。（巻七十一乙）

二、旧の巻七十七の内題に「巻七十三」と書き入れ、尾題の部分に別紙を継張してこれに「巻七十三」と記して、巻七十三(甲)に改造した。（巻七十三甲）

三、旧の巻七十八の後半に旧の巻七十九の前半を継張し、その首尾に「巻七十五」と記せる後補紙を充て、あらたに巻七十五を作つた。（巻七十五）

四、旧の巻七十九の後半に旧の巻八十の前半を継張し、かつその内題に「巻七十六」と書き足し、尾題の部分を截ち切つて「巻七十六」と記せる後補紙を継ぐことによつて巻七十六を新造した。この首尾の改竄はさきの巻七十三の場合と同手段である。（巻七十六）

以上の第四類DE二本の巻次内容の改竄を、同類ABおよび大正蔵経所収大智度論（麗本）の巻次内容の配分と比較すると左の表のようになる。

品名	大正蔵経 麗本 智度論	聖語蔵 A・B本	聖語蔵 D・E本
校量法施	巻六十	巻六十	
随喜廻向	巻六十一	巻六十一	
信受照明	巻六十二	巻六十二	
歎浄同余	巻六十三	巻六十三	
無作実相同余	巻六十四	巻六十四	
諸波羅蜜同余	巻六十五	巻六十五	
歎信行	巻六十六	巻六十六	
同余	巻六十七	巻六十七	巻七十一(甲)
魔事 両不和合	巻六十八	巻六十八	巻七十二
仏同余 母	巻六十九	巻六十九	巻七十三(乙)
問同余 相	巻七十	巻七十	(旧巻七十四)
大事起 譬喩 善知識 趣一切智	巻七十一	巻七十一(乙)	旧巻七十五
（巻五十九以前略）			

大如	阿毘跋致 転不転	同余 燈炷	同余 夢中入三昧 恒伽提婆	学空不証 夢中不証	同同余 等学学	願楽 称揚	同余 嘱累	無尽方便 六度相摂	同余	大方便	三同余 恵	道菩薩行樹 種善根	（巻第八十六以下略）
巻七十二	巻七十三	巻七十四	巻七十五	巻七十六	巻七十七	巻七十八	巻七十九	巻八十	巻八十一	巻八十二	巻八十三	巻八十五	
	(甲)巻七十三		巻七十五	巻七十六	巻七十七				巻八十一	巻八十二	巻八十三	巻八十五	
	旧巻七十七	(旧巻七十八)	旧巻七十九	旧巻八十									

五、旧の巻八十の後半に後補紙を継張、これに経の第六十一同学品、第六十二等学品の略釈を記し、内題を「七十七」に書き変えて巻七十七を作つた。（巻七十七）

右の表を見ると、大正蔵経本とAB二本は、巻次内容が一致している。現在欠失している巻七十一から巻八十までの十巻も、前後の巻の状態よりすれば、やはり同様であつたと考えてよいだろう。つぎにDE二本は、巻次内容が大正蔵経本と相違しているが、これの改竄である巻七十一乙、七十三甲、七十五、七十六、七十七の五巻は合致している。換言すれば右の五巻は、AB二本と巻次内容が合致しているわけで、改竄にあたつてその巻次内容をAB二本のそれに揃えようという意志の働いていたことが明かになるのである。

而してそのうち四巻（巻七十一乙は内題尾題とも巻数を書き改めるに止まる）の内題尾題の後補の部分の形式を見れば

（巻　数）	（内　題）	（尾　題）
「巻七十三甲」	大智度経論巻第七十三	大智度経論巻第七十三 釈第五十四品 乾第五十五品
「巻七十五」	大智度経論巻第七十五 釈第五十六品下 乾第五十八品	大智度経論巻第七十五 釈第五十六品下 乾第五十八品
「巻七十六」	大智度経論巻第七十六	大智度経論巻第七十六 釈第五十九品 乾第六十品上
「巻七十七」	大智度経論巻第七十七 釈第六十品下 乾第六十二品	大智度経論巻第七十七

右のように、すべてAの題名形式を踏襲しているのである。

これを要するに、第四類六十三巻は題名形式の異るABCDEの五種の別本に分類されるが、それら相互に無関係なわけではなく、DE二本の改竄より推察して、現在最も残部の多いAを中心とし、その不足分を、後者四本をもつて補充しようとしたものであると思われるのである。そしてその際、DE二本のみはA本と巻次内容に食違いがあつたので、これをA本と揃えるためには、前述の如き切り継ぎ改竄を余儀なくされたものと考えられるのである。なおDE二本中の巻七、七十一甲、七十二、七十三の四巻が原形を全うして改竄されていないのは、BC本中にこの四巻と同内容の巻があつて、ために殊更、食違いのある右四巻から改竄補充する必要がなかつたのであろう。

古くから、一切経など大部な経典の集成にあたつては種々の別本をあつめ、さらにその不足分を書写して、巻数を揃えることはしばしば行われているが、右のように、この大智度論にもそれに似た事例があり、本経の場合は経巻自体にまで手を入れている点、とくに興味ふかいと言うべきである。このようにしてDE二本の改竄再編成のゆえんも解明出来るのである。

さてしからば、DE二本のそのような改竄が行われたのはいつの頃であろうか。この点については右の二本がいずれも改竄年代を附記していないので明確には知り得ないが、E本巻七十三甲の後補標紙から間接的に改竄年代の最下限の推定が出来る。

すでに述べたとおり巻七十三甲の標は、見返しの墨書

「文永元年甲子九月二十三日酉時於海住山十輪院　法印宗性」

結構表紙　奉書　外題畢

によつて、文永元年九月二十三日東大寺の宗性の後補で、外題も同時に書かれたことがわかる。その外題は「大智度論巻第七十三。」と宗性の筆蹟で記されている。しかるに本巻は、第四、第六の両項で述べたように、元来は巻七十三でなく巻七十七であつて、後補外題と本来の内容とは巻次において食違いがある。従つて、もし本巻の巻次の改変が、宗性の修補の頃未だ行われずに旧の巻次のままであつたならば、宗性はその襟修補の際、当然旧の巻次に基いて、外題を「大智度論巻第七十七。」としたためたはずと思われるから、この改竄は、文永元年九月に宗性が本経を披閲したときすでになされてしまつており、ために宗性は改竄後の巻次に倣つて後補襟紙の外題に「巻七十三。」と奉書したものと推察するに難くない。

すなわち右の一事より推して、DE二本数巻に加えられている改竄は、おそくとも文永元年九月には、現在見るがごとき状態になされていたことが明かになるのである。

結　語

以上、聖語蔵唐経大智度論を調巻・題名の両形式より眺めて、調巻上四種にわかれ、また題名形式より見れば、そのうちの第四類が五種の別本混成——併せて八種の別本が集つていることを明かにし、更に第四類中の数巻に加えられた改竄のゆえんについて、それが同類中のA本に他の四本を統合せんがための所産であることを述べた。

これをもつて本論の主題を大略説きおわつたわけであるが、なお本経についての疑問が悉く解かれたとは言えない。たとえば巻七の巻初の書入れ「古本第六之初当之」および巻六乙の巻初の「古本第七之初当之」の「古本」とはいかなるものを指すのか。また巻七十一甲の外題と尾題の巻数の食違いは何を意味するか等々、解決出来ない問題も多いが、欠本による資料の不備などのため、未解決のまま放置するのほかなかつた。今後、これらの大智度論の僚巻が発見されて空白が埋められ、疑問解決の端緒が得られるならばさいわいである。